

ナボコフと勘違いの賜物—デビッド・ボウイに捧ぐ

メドロック 皆尾麻弥

本稿は締切り間際に執筆依頼されたものであり、それゆえに学術的意味をほとんど持ちえない文章だということを、まずはお断りした上で、話をすすめることはならない。

1. 私を励ましてくれたことば(?)

平成28年1月21日、佛教大学「朝のおはなし」にて、「私を励ましてくれたことば」という題目で短い話をする機会があった。私はそこで、つい先だって亡くなったイギリスのロックスター、デビッド・ボウイが、私の研究対象であるウラジーミル・ナボコフを読んでいた、という驚くべき発見について感慨深く語った。ところがその一週間後（本稿を執筆し始めた、まさに今日である）、ボウイは実際のところナボコフを読んでいなかったらしいという、さらに驚くべき発見をした。本稿は、したがって、「朝のおはなし」の訂正版としてお読みいただければ幸いである。

ボウイがナボコフを読んでいたらしい、と私が結論づけた経緯を、まずは説明しておかななくてはならない。発端は、1月13日付朝日新聞に掲載された、音楽家巻上公一氏によるボウイの追悼文である。その中で巻上は、ボウイは「ナボコフやバロウズの小説からヒントを得たり」して、「文学的にロックを表現していた」と書いている。ナボコフ読みの私はたいへんな衝撃を受け、実際にどのような形でナボコフに「ヒント」を得ているのか、調べてみた。そこでたどりついたのが、2013年に発表されたアルバム、*The Next Day* に収録され

た、“I’d Rather be High”という曲だ。もともとボウイは好きだったのだが、90年代以降の楽曲はあまり馴染みがなく、この曲も先日はじめて聴くことになった。歌詞の冒頭にナボコフが登場する。

Nabokov is sun-licked now
Upon the beach at Grunewald
Brilliant and naked just
The way that authors look

この節を読んで私はすぐに、ナボコフの小説『賜物』(*The Gift*)への言及であることに気づいた。具体的には、第5章、語り手兼主人公であるフョードル・ゴドゥノフ・チェルディンツェフが、グルネヴァルトの湖畔で裸になって日光浴をする場面の、次の文章である：“The sun licked me all over with its big, smooth tongue.” (*Gift* 333) ベルリンを舞台にしたこの小説は、詩人を志すフョードルというロシア生まれの青年が、詩作を試みたのちに小説家としての道を見出すという、表面上のプロットを持つ（表面下ではもっと複雑なことが起きているのだがそれについては後ほど触れる）。テキスト上では、太陽の舌に舐められるのはフョードルだが、ボウイの歌ではナボコフに変わっている。

『賜物』はナボコフがロシア語で書いた最後の小説で、もちろん英語訳も出版されているが、読む人はかなり限られている。そういう作品をどうやらボウイが読んだらしい、という発見が、私にとっていかに衝撃的だったかということ、おわかりいただけると思う。

この類いまれな、尊敬すべき大スターであるボウイが、私の研究対象であるナボコフの小説を、しかも私がナボコフの中で一番好きな小説を、しかもほとんど誰も読まないような小説を、読み、それを自分の曲に組み込んでいる、という発見は、私を大変勇気づけてくれた。文学研究というのはとても孤独な作業であり、私と作者との二人だけの対話でもあるわけで、そんなときに、あのボウイも同じ文章を読んでいて、ということが分かっただけで、突然、私は一

人ではない、と感じられた。私がこの小説を論じることと、ボウイが自分の楽曲の中にこの小説を組み込むことは、ほぼ同列のことだと思えた。

一つの文学作品は偉大な別の芸術家に影響を与え、新たな芸術を生む、そうした文化の連続性・持続性を、あらためて実感した、とも付け加えておきたい。私はこの発見によって、励まされ、ボウイとの一体感によって特別な何かを得たような、不思議な感覚を得た。

2. ナボコフにおける太陽と authority あるいは authorship のテーマ

ボウイが『賜物』から選び出した（と私が思った）場面が、あの日光浴場面であったという事実（？）が、ボウイの創作という文脈から考えた際にいかに似つかわしく適切であるか、ということのを、もう少し説明したい。ボウイといえば、Ziggy Stardust や Major Tom ⁽¹⁾ など、自身の創作したキャラクターに扮して作品をパフォーマンスしたことでよく知られる。ボウイにとってこれらのキャラクターは、自分とは全く別の人格であると同時に、限りなく自分に近い、分身のようなものであっただろう。これはちょうどある種の作家と、その作家の創作した主人公との関係に似ている。例えば、ナボコフの主人公（というか語り手）には、ナボコフ自身の断片が多かれ少なかれ吹き込まれた者が多い。ナボコフに似ていて、しかし当然ながら全く別の人格である。そうした、創作した者 / 創作された者の関係というモチーフによって、少しこじつけの気味もあるかもしれないが、ナボコフとボウイというのはわりに容易に結びつけることができそうに感じた。上述の日光浴の場面で焦点が当てられるのは、作者と主人公の関係ではなく、語り手と主人公の関係と両者のアイデンティティーの問題なので、少々視点がずれてしまうのだが、それでも作り手と作られた者の関係、という点では共通している。ボウイがここに注目していたのなら、それはとても似つかわしいと言える。

さて、この場面で起きていることをもう少し詳細に観察してみたい。この小説において、語り手はまず三人称で語りはじめ、突然一人称に変わり（語り手

と主人公が混じり合う)、また三人称に戻る、というように、語りの人称がおしまいまで揺れ続ける。くだんの部分ではまず、朝の散歩に出かけるフョードルについて、語り手はまず he という三人称で語り始める。しかし、彼が松林に差し掛かったところで、語りは一人称に移行する⁽²⁾。“Give me your hand, dear reader, and let’s go into the forest together” (*Gift* 331) というあたりを読むと、回想し、書いているフョードルと、回想されているフョードルが一体化し、書いている時間と書かれている時間とが混じり合うのがよく感じられる。そのしばらく後、例の“The sun licked me”の文章が現れ、そのすぐ後に、次の重要なパッセージが続く。

As a book is translated into an exotic idiom, so was I translated into sun. The scrawny, chilly, hiemal Fyodor Godunov-Cherdyntsev was now as remote from me as if I had exiled him to the Yakutsk province. He was a pallid copy of me, whereas this aestival one was his magnified bronze replica. My personal I, the one that wrote books, the one that loved words, colors, mental fireworks, Russia, chocolate and Zina—had somehow disintegrated and dissolved… (*Gift* 333-334)

さて、authorship というのがこの小説の大きなテーマの一つであり、そのテーマを論じる際に必ずと言ってよいほど言及されるのが、まさにこの部分である。語りの I がまず「太陽に翻訳される」。初期のフョードルは遠のき、今語られているフョードルはそのレプリカだと表現される。そしてそれを書いている私は、「溶けて」しまう。溶けているのなら、誰がこれを書いているのか、という不思議な感覚を覚えずにはいられないが、その瞬間、I は消え(まるで本当に溶けてなくなってしまったかのように)、再び三人称に戻る(そこで完全に I という語り手が消えてしまうならば、話は分かりやすいのだが、小説最後の瞬間にまた I の語りが戻ってくる。ここではそのあたりを追究することはしない)。このように、太陽の光によってフョードルは化学反応を起こし、分裂しているように見える。太陽というものが、主人公と語り手自身に、何か大

きな作用を持つのである。

このあたりで、読者はこの小説の前半に出てきた次の文章を思い出す。
“Thus I use a different method to study each of the three individuals, which affects both their substance and their coloration, until, at the last minute, the rays of a sun that is my own and yet is incomprehensible to me, strike them and equalize them in the same burst of light.” (*Gift* 42) ここで語り手は、ヤーシャという若者を中心とした3人について語る際の方針について説明しているのだが、語ることと太陽の光というものが、奇妙に結びついている。この部分の太陽は the sun ではなく a sun であり、語り手の所有物としての太陽ではあるが、いずれにせよ、太陽と物語る力は密接に結びついている。

太陽はある意味、権威であり、語り手のコントロールできないもの、ナボコフという作者自身に限りなく近い存在、といってもよいかもしれない。これについては Connolly が次のように言っている。“the ‘sun’ which begins to transform (or “translate”) the narrating entity into itself may be an emblem of a higher authorial consciousness—that which is responsible for creating the character Fyodor” (Connolly 212) そのような authority である太陽に、語り手が「翻訳される」とあるのは、語り手の、小説家としての成長、格上げを意味していると言ってもよいであろう。語り手とナボコフという作者自身が、限りなく近づく瞬間だ。

ナボコフ作品の常として、この小説も、語り手の創作物と読者が手にしている実際の本との、非常に奇妙な関係性というもの抜きには語ることができない。ナボコフが書いたこの『賜物』という小説と、フォードルが語り手として書いた小説は、二重写しになって読者の目に見える。それはちょうど、歌を歌うボウイと、歌う Ziggy Stardust が二重写しになると似ていなくもない。物語性のある曲を作り、劇的な主人公を創作・自演したボウイは、やはり「文学的にロックを表現」していたわけである。

3. ナボコフにおける勘違いのテーマ

ボウイはどのようにナボコフの小説からヒントを得ていたのか、ということ考えた末に、以上のようなことを漠然と思い浮かべ、一通り納得し、嬉しい気持ちにもなった。ところがこれは、大きな勘違いであった。国際ナボコフ学会のメーリングリスト NABOKOV-L に、ボウイは実際には『賜物』を読んでいなかったらしいという内容のメッセージが掲載されていたのである。投稿者の Schlegel は、O'leary によるウェブ上の文章を参照しているので、当該部分を引用する。

What's interesting is that Bowie may not have read *The Gift* at all, as the passage which I quoted is included in a book that Bowie very much *had* read: Otto Friedrich's *Before the Deluge: A Portrait of Berlin in the 1920s*. Friedrich's survey of Weimar Berlin, along with Christopher Isherwood's Berlin novellas, fueled Bowie's conception of Berlin when he moved there. Friedrich was one of Bowie's maps to an imagined Berlin, and whenever Bowie wasn't content with the depleted, heroin-filled West Berlin of 1977, he could escape into pre-war fantasies... (O'leary)

ボウイは麻薬のため心身ともに疲労していた1976年、アメリカからヨーロッパへ渡り、ナボコフも亡命生活を送ったベルリンで、数年間を過ごした⁽³⁾。そのボウイにとっての理想のベルリン像を、Friedrich らの著述が形成していたらしく、ナボコフの『賜物』はその中で言及されていたわけだ。ボウイが、実際には『賜物』を読んでいなかった、という発見は、当然ながら私に大きな失望を抱かせた。

しかし、すぐに私はこれこそナボコフ的体験ではないかと思い当たった。ナボコフの小説によくある仕掛けの一つに、登場人物がある啓示的な体験をして、

それによって何かを確信するものの、実は誤解であった、というものがある。例えば、『セバスチャン・ナイトの真実の生涯』(*The Real Life of Sebastian Knight*)では、セバスチャンが自伝的小説の中で、母親が亡くなった南仏の町 Roquebrune を訪れるというエピソードが語られる。そこで亡くなった母の滞在していた別荘を探し当て、その庭で母の亡霊を見ているような感覚、そして母親と一体化するような感覚に陥るのだが、のちにその町が、母親の亡くなった町と同名の、別の町であったと気づく。同じように、『セバスチャン・ナイトの真実の生涯』の語り手でセバスチャンの腹違いの弟である(らしい)Vは、小説の最後、危篤状態と知らされた兄を見舞う。Vは病室の入り口の間(ま)で、兄の寝息を耳にする。兄のベッドがある次の間(ま)は暗く、セバスチャンを目にすることはできないが、Vは次のように感じる。“His presence in the next room, the faint sound of breathing, gave me a sense of security, of peace, of wonderful relaxation” (SKRL 200)さらに、今まで感じたことのなかったような、セバスチャンとの強い絆を感じ始める。“That door standing slightly ajar was the best link imaginable. That gentle breathing was telling me more of Sebastian Knight than I had ever known before” (SKRL 201) 病気のセバスチャンという存在から、語り手は何かを悟ったような気持ちになる。ところがその後、看護婦に、今の患者はケーガン氏で、セバスチャンは昨日亡くなったということを教えられる。しかしVは、それでもあの体験は自分の人生を徹底的に変えてしまった、と告白する(SKRL 202)。勘違いではあったが、その体験自体にVは意味を見出そうとする。このことは、母親とは全く関係のない場所で、亡くなった母親との一体感を得たセバスチャンの体験と、セバスチャンがそれをどう捉えたか(ということとは明確には書かれていないが)、ということと、重なっている。

ナボコフの小説では、これと似たようなことがたびたび起こる。そういうわけで、私の身に起こったこともこのパターンに沿っている、と感じたわけである。まさに、「人生が芸術を模倣する」瞬間である。ボウイは『賜物』を読んでいなかった。しかし、「読んでいた」という勘違いが私にもたらした至福は本物であり、その(偽)発見は確かに、私の研究に何かをもたらしてくれた。

それは名状しがたい何かであるが、賜物には違いないと感じる。

3. さいごに

この話の締めくくりとして、ナボコフとボワイ、それぞれの最後の作品についてひとこと言っておきたい。私は、ある二人の作家の作品を「比較」という論法に全く意義を感じないので、自分では間違ってもそのようなことはするまい、と固く心に誓っているのではあるが、今回はただ似ている、ということをお示しするだけということで、仕方なく比較することをお許し願いたい。具体的に言うと、ボワイの最期が最後のアルバムで語られていることと、ナボコフの最後の小説にも作家の死が描かれることの偶然について、触れておきたいのである。

まずはナボコフの絶筆、『ローラのオリジナル』(*The Original of Laura*)について。ナボコフが死の直前まで書き続け、未完に終わったこの小説は、とても簡潔に説明することなど不可能な作品だが、訳者若島のことばを借りれば、「第1章から第5章までは、テキストから一人称の語り手としての「私」を消すという、ナラトロジー的な実験であり、第6章から第7章までは、肉体としての「私」を消そうという、哲学的かつ医学的な実験」である(訳者解説 224)。ちなみに、「一人称の語り手としての『私』を消す」という部分は、『賜物』のグルネヴァルト場面で起きていたことをも想起させる。このようにナボコフは既にこのテーマについて、初期の作品でも構想していた。さて、この小説は「見えない語り手」によって語られ、これは若島によるとロシア系の移民作家イヴァン・ヴォーンらしいことがわかる。一方もう一人の主要人物フィリップ・ワイルドは、自己消滅の実験を行う神経学者である。さらに、「『私』を文体的にも肉体的にも抹消するというテーマを持つ」(訳者解説 231)というこの小説の内部で、作者ナボコフ自身も姿を消すという手品を披露している、というのが若島の解釈である。

『ローラのオリジナル』の完成は、まさしく確実にやってくる死との競争

だったのだろう。

そこまで思いを巡らせると、一瞬、非在の語り手であるロシア系移民作家のイヴァン・ヴォーンと、ナボコフの姿が重なって見える。見えない語り手の陰から、作者ナボコフがちらりと姿を見せたような気がする。(中略) 物語の表面から姿を消しているように見えて、こっそりと陰から姿を現わすという、ナボコフお得意のマジックだ。『ローラのオリジナル』は、死によって現実世界から姿を消しながら、作品の中に生きていた証を永遠に刻み込もうとする、言葉の魔術師ナボコフが最後にやってのけた消失奇術なのである。(訳者解説 236-7)

さて、ナボコフのやってのけた消失奇術を、ボウイも彼独自の方法でやっている。死の二日前に発表された曲 “Lazarus” のミュージックビデオの中で、ボウイは目隠しの要領で包帯を巻きつけ、病院のベッドから歌いかける。そして、おしまいでボウイは暗いクローゼットに入り、扉が閉ざされる。消失奇術を見せようとしている魔術師さながらに。最後のアルバム(『★(ブラックスター)』)製作に携わったプロデューサー、Bisconti⁽⁴⁾も認めているように、ボウイの最後のアルバムとシングルは、死を目の前に控えた彼からの “parting gift (お別れの贈り物)” であった (Furness)。

芸術家としての意識を強く持つ者であれば、死期迫る日々に創作した自らの最後の作品に、死を意識したメッセージを込めるということは自然なことであろう。それゆえに、二人の最後の作品がこのように共通性を持つのは当然といえは当然のことである。

死者となったナボコフが太陽に嘗められ、太陽に翻訳されたのであれば、ボウイは黒星に翻訳されたということか。

注

- (1) Ziggy Stardust は1972年のアルバム *The Rise and Fall of Ziggy Stardust and the Spiders From Mars* で生まれたペルソナ。1969年の曲 “Space Oddity” は、Major Tom という架空の宇宙飛行士が主人公で、これもボウイのお気に入りのペルソナの一つ。

- (2) ナボコフの作品において、しばしば森というのが特別な舞台として使われることがある。この作品もそうであるが、例えば代表作『ロリータ』(*Lolita*)でも、アワーグラス湖のある松林は一種魔術的な意味合いを帯びているし、『道化師をごらん!』(*Look at the Harlequins!*)においては、ロシアから逃亡する語り手が御伽噺のような森を通して西側へ脱出し、そこで一度アイデンティティーを振り落とす。さらにクライマックスでは運命的な散歩の途中、松林の敷居の部分で語り手は全身麻痺の発作に見舞われ、その後アイデンティティーを見失う、というような展開になる。『賜物』においても、森という舞台でアイデンティティーの問題が露出する。アメリカ文学において「森」が特別な意味を持つというのはよく言われることだが、ナボコフもその文脈で読むことができそうである。
- (3) O'leary の文章にある1977年というもの、ナボコフ的な暗示の数字と読みたい。1977年にナボコフは亡くなり、1977年にボウイはベルリンでナボコフのことをふと考え、そして1977年に私は生まれた。
- (4) Furness は、Bowie と長く仕事をした Tony Bisconti が自らの Facebook のページ上に載せた、“He [Bowie] made *Blackstar* for us, his parting gift.” というメッセージを引用している。

参考文献

- Bowie, David. ★. 2016, Columbia. CD.
- . “I’d Rather be High”. *The Next Day*.
- . “Lazarus”. 2015, ISO. Digital download.
- . *The Next Day*. 2013, Columbia. CD.
- . *The Rise and Fall of Ziggy Stardust and the Spider From Mars*. 1972, RCA. LP.
- . “Space Oddity”. 1969, Philips. 7”.
- Connolly, Julian W. *Nabokov’s Early Fiction: Patterns of Self and Other*. Cambridge: Cambridge UP, 1992. Print.
- Furness, Hannah. “David Bowie’s last release, Lazarus, was ‘parting gift’ for fans in carefully planned finale”. *The Telegraph*. 13 Jan. 2016. Web. 15 Jan. 2016.
- Schlegel, Joseph. “David Bowie and Nabokov”. NABOKOV-L. 12 Jan 2016. Web. 27 Jan. 2016.
- O’leary, Chris. “I’d Rather be High”. Pushing Ahead of the Dame. 9 Oct. 2015. Web. 27 Jan. 2016.
- Nabokov, Vladimir. *The Annotated Lolita*, ed. with preface, introduction, and notes by Alfred Appel, Jr. New York: Vintage, 1991. Print.

- . *The Gift*. Trans. Michael Scammell with the collaboration of the author. New York: Vintage, 1991. Print.
- . *Look at the Harlequins!* New York: Vintage, 1990. Print.
- . *The Original of Laura: (Dying is Fun)*. London: Penguin, 2009. Print.
- . *The Real Life of Sebastian Knight*. New York: Vintage, 1992. Print.
- 卷上 公一. 「天上からのシャウト」『朝日新聞』13 Jan. 2016. Print.
- 若島 正, 訳. 『ローラのオリジナル』作品社, 2011. Print.
- . 「訳者解説」『ローラのオリジナル』207-7.